

【晉紀十五】 起關逢涪 口灘，盡強圉大淵獻，凡四年。

■東晉、**前趙**前趙、**後趙**後趙▲慕容氏（前燕）、統国訳漢文大成經子史部第 6 卷 030p

肅宗明皇帝下太寧二年（甲申，324年）

■**王敦は會稽の周札を討伐** **春，正月**，王敦は誣いて、

「**周嵩、周廷**は**李脱**と與に不軌を為さんと謀る」

と、**嵩、廷**を軍中に収め、これを殺す。參軍の**賀鸞**を遣わして**沈充**に呉に就き、盡く**周札**の諸兄の子を殺す。兵を進めて會稽を襲い、**札**は拒ぎ戦い而して死す。

後趙■**劉遐は後趙の寇で泗口に撤退** 後趙の將兵都尉の**石瞻**は下邳、彭城を寇して、東莞（武帝が泰始元年に琅邪を分けた郡）、東海を取り、**劉遐**（?-326、中国の東晋の軍人・塢主。字は正長。本貫は広平郡易陽県）は退きて泗口（泗水の淮水に注ぐ口、江蘇省徐海道銅山県、現・徐州市銅山区）を保つ。

後趙 **前趙** **二趙の河東弘農間の攻防** 司州刺史の**石生**は趙の河南太守の**尹平**を新安（河南省河洛道新安県、三门峡市義馬県）に撃ち、之を斬り、五千餘戸を掠め而して歸る。是より二趙は隙を構え、日々相い攻め掠め、河東、弘農之間は、民は生を聊んぜず矣。

後趙■**後趙と晉の許穎攻防** **石生**は許（許昌）、穎（穎川）を寇し、俘獲は萬計り。**郭誦**（李矩の外甥）を陽翟（河南省開封道禹県、現・許昌市禹州市）に攻め、(6-031p) **誦**は與に戦い、大いに之を破り、**生**は退きて康城（河南省開封道禹県、現・許昌市禹州市）を守る。後趙の汲郡内史の**石聰**は**生**の敗れるを聞き、馳せて之を救い、進みて司州刺史の**李矩**、穎川太守の**郭默**を攻め、皆な之を破る。

大成 成主の**雄**は、后の**任氏**に子無く、妾の子十餘人有り、**雄**は其の兄の**蕩**（李蕩、?-303、）之子の**班**を立てて太子と為し、**任后**をして之の母たら使む。群臣は諸子を立てるを請い、**雄**は曰く、

「吾が兄（李蕩、死すは 85 卷惠帝太安二年にあり）は、先帝之嫡統なり、奇材大功有り、事は克つに垂々とし而して早世し、朕は常に之を悼む。且つ**班**は仁孝好學にして、必ず能く先烈の荷を負わん。」

太傅の**驤**、司徒の**王達**は諫めて曰く、

「**先王**は嗣を立てるに必ず子とする者、定分を明らかに而して篡奪を防ぐ所以也。宋の**宣公**（公羊傳隱公三年に曰く、宋の宣公は繆公に謂って曰く、吾が興夷を愛するを以てすれば、則ち汝を愛するに若かざらんや。以て社稷宗廟の主と為せば、則ち興夷は汝に若かず。盡ぞ終に君と為さざると。宣公死し、繆公立、其の二子の莊公馮と左師勃とわ逐いて、国を興夷に致す。莊公馮は興夷を弑す、繆公は宣公の弟なり）、吳の**餘祭**（公羊傳襄子公二十九年に見える。吳子謁及び餘祭は其の同母弟の季札に位を傳えんと欲し、季札は承けずして逃れ、其の後吳は大いに亂る）は、以て觀るに足る矣。」

雄は聽かず。**驤**は退き而して流涕して曰く、

「亂れるは此より始まる矣！」

班の人と為りは謙恭にして士に下り、動くに禮法に遵じ、**雄**は大議有る毎に、輒ち之に豫ら令む。

前凉 **張茂死して張駿立つ** **夏，五月**，甲申（14日）、**張茂**は疾病となり、世子の**駿**の手を執りて泣いて曰く、

「吾が家は世々孝友忠順を以て著稱せられ、今天下大亂すると雖も、汝は之を奉承し、失う可からざる

也。」

且つ下令して曰く、

「吾が官は王命に非ず、苟くも以て事を集すとも、豈に敢えて之を榮とせんや！死する之日、當に白帟（被り物）を以て棺に入り、朝服を以て斂（死体を棺に収める）する勿かれ。」

是の日、薨ず。愍帝の使者の史淑は姑臧に在り（長安が覆没して帰れず）、左長史の汜諱、右長史の馬謖等は淑をして駿を大將軍、涼州牧、西平公に拜し、其の境内を赦せ使む。前趙主の曜は遣使して茂に太宰を贈り、諡して成烈王と曰う。■（東晋は）駿を拜して上大將軍、涼州牧、涼王とす。

【王敦病、王敦討伐令】

■ 〔王敦は疾甚しく後継に王應指名〕 王敦は疾甚だしく、詔を矯めて王應を拜して武衛將軍と為し以て自らの副とし、王含を以て驃騎大將軍、開府儀同三司と為す。錢鳳は敦に謂って曰く、

「脱し不諱（王敦の死）有れば、便ち當に以後の事は應に付ける邪？」

敦は曰く、

「非常之事は、常人が能く為す所に非ず。且つ應は年少し、豈に大事に堪えんや！我死する之後は、兵を釋き衆を散じ、身を朝廷に歸し、門戸を保全するに若くは莫く、上計也。退きて武昌に還り、兵を收めて自ら守り、貢獻の廢せざるは、中計也。吾尚ほ存するに及びて、衆を悉くし而して下り、萬一にも僥倖するは、下計也。」

鳳は其の黨に謂って曰くね

「公之下計は、乃ち上策也。」

遂に沈充と謀を定め、敦の死を俟ち即ち亂を作さんとす。又た宿衛の尚ほ多きを以て、奏して三番にして二を休ま令む。

■ 〔溫嶠は偽りて王敦に仕え、建康で帝に密告〕 初め、帝は中書令の溫嶠を親任し、(6-032p) 敦は之を惡み、嶠を左司馬と為さんと請う。嶠は乃ち繆りて勤敬を為し、其の府事を綜し、時に密謀を進めて以て其の欲に附く。深く錢鳳に結び、之が聲譽を為し、毎に曰う、

「錢世儀（錢鳳の字）は精神腹に滿つ。」

嶠は素より藻鑒（人物を鑑定する力）之名有り、鳳は甚だ悦び、深く嶠と結んで好し。會々丹楊尹は缺け、嶠は敦に言つて曰く、

「京尹は咽喉之地なり、公は宜しく自ら其の才を選ぶべし、恐らくは朝廷の人を用いること、或は理を盡くさざらん。」

敦は之を然りとし、嶠に問う、

「誰か可なる者や？」

嶠は曰く、

「愚は謂うに錢鳳に如かず。」

鳳は亦た嶠を推し、嶠は偽りて之を辭し、敦は聽かず、六月、嶠を表して丹楊尹と為し、且つ朝廷を覘伺（伺い視る）せ使む。嶠は既に去り而して錢鳳が後に於いて之を間止せんことを恐れる。敦が餞別するに因り、嶠は起ちて酒を行い、鳳は至る。鳳は未だ飲むに及ばず、嶠は偽りて酔い、手版を以て鳳を撃つ。幘（もとどり）は墜ち、色を作して曰く、

「錢鳳は何人ぞ、溫太真（溫嶠の字）は酒を行うに而して敢えて飲まず！」

敦は以て酔えりと為し、^{ふた}兩つながら之を釋す。嶠は去るに臨み、敦と別れるに、涕泗して横流し、閣を出て復た入る者は再三なり。行きて後に、鳳は敦に謂って曰く、

「嶠は朝廷に於いて甚だ密にして、而して庾亮と深く交わり、未だ信じる可からざる也。」

敦は曰く、

「太真は昨は酔い、小しく聲色を加える、何の便ち爾^{しか}に相い讒するを得るや！」

嶠は建康に至り、盡く敦の逆謀を以て帝に告げ、先ず之が備えを為すを請い、又た庾亮と共に敦を討つ之謀を畫す。敦は之を聞き、大いに怒りて曰く、

「吾は乃ち小物の欺く所と為る！」

司徒の導に書を與えて曰く、

「太真は別來して幾日ぞや、此くの如き事を作すや！當に人を募りて之を生致（生けどりにして送り届ける）し、自ら其の舌を抜くべし。」

■ 〔朝廷は王敦討伐体制を敷く〕 帝は將に敦を討たんとし、以て光祿勳の應詹^{おうせん}に問い、詹は之を成すを勧め、帝の意は遂に決す。丁卯（27日）、司徒の導に大都督を加え、揚州刺史を領せしめ、溫嶠を以て東安北部諸軍事を都督せしめ、右將軍の卞敦と與に石頭を守らしめ、應詹を護軍將軍と為し、前鋒及び朱雀橋南の諸軍事を都督せしめ、郗鑒をして衛將軍を行い、從駕諸軍事を都督せしめ、庾亮をして左衛將軍を領さしめ、吏部尚書の卞壺を以て中軍將軍を行わしむ。郗鑒は以為らく軍號は事實に益無し、固辭して受けず、臨淮太守の蘇峻、兗州刺史の劉遐を召して同じく敦を討たんと請う。詔して峻、遐及び徐州刺史の王邃、豫州刺史の祖約、廣陵太守の陶瞻等を征して入りて京師を衛らしむ。帝は中堂（宣陽門外）に屯す。

■ 〔王敦討伐の尚書〕 司徒の導は敦の疾い篤きを聞き、子弟を帥いて敦の為に哀を發し、衆は以て敦は^{まこと}信に死せりと為し、鹹な奮志有り。是に於いて尚書は詔を騰して敦の府に下し、敦の罪惡を列して曰く、
「敦は輒ち兄の息（息子の應）を立てて以て自ら代を承ける、未だ宰相の繼體し而して王命に由らざる者有らざる也。頑凶相い奨め、顧忌する所無し。志は兇丑^は（兇醜）を驕せ、以て神器を窺う。天は奸を長ぜず、敦は以（既にの意味）て隕斃す。鳳は凶宄を承け、彌々^{いよいよ}復た逆を煽ぐ。今司徒の導等を遣わし虎旅三萬、十道並び進む。（6-033p）平西將軍の邃等は精銳三萬、水陸は勢いを齊えしむ。朕は親ら諸軍を統べ、鳳之罪を討たん。能く鳳を殺して首を送る有れば、五千戸侯に封じん。諸々の文武の敦^{ととの}の授用する所と為る者は、一に問う所無し、或は猜嫌して、以て誅滅を取る無し。敦之將士の、敦に従いて年を彌^{わた}り、家室を違ひ離れるは、朕は甚だ之を^{あわれ}愍む。其の單丁（家に男子一人）にして軍に在るは、皆な遣りて家に歸し、終身調せず。其餘は皆な（休）假の三年を與えん、休み訖りて台に還りて、當に宿衛と例を同じくして三番（三番のうち二を休む）とす。」

■ 〔郭璞は自らの寿命を筮せらる〕 敦は詔を見て、甚だ怒り、而して病は轉た篤し、自ら將ず能わず。將に兵を擧げて京師を伐たんとし、記室の郭璞をして之を^{ぜい}筮せ使め、璞は曰く、
「成る無し。」

敦は素より璞が溫嶠、庾亮を助けるを疑い、卦の凶なるを聞くに及び、乃ち璞に問いて曰く、

「卿は更に吾が壽（命）は幾何くか筮せよ？」

璞は曰く、

「思うに向の卦は、明公が事を起こせば、必ず禍は久しからず。若し武昌に住けば、壽は測る可からず。」

敦は大いに怒りて曰く、

「卿の壽は幾何や？」

曰く、

「命は今日の日中に盡さん。」

敦は乃ち璞を収め、之を斬る。

【王含らは建康に押し寄せる】

■敦は錢鳳及び冠軍將軍の鄧岳、前將軍の周撫等をして衆を帥いて京師に向かわ使む。王含は敦に謂って曰く、

「此は乃ち家事なり、吾は當に自ら行かん。」

是に於いて含を以て元帥と為す。鳳等は問いて曰く、

「事克つ之日、天子は雲何？」

敦は曰く、

「尚ほ未だ南郊せず、何ぞ天子を稱するを得ん！便ち卿の兵勢を盡くし、東海王（元帝は第三子冲を以て東海王越の後を奉じせしむ、裴妃は越の妃）及び裴妃を保護し而して已む。」

乃ち上疏して、奸臣の溫嶠等を誅するを以て名と為す。秋，七月，壬申（1日、元嘉曆では辛未）朔，王含等の水陸五萬は江寧（江蘇省金陵道江寧県の西南60里、現・南京市江寧区）の南岸に奄至し、人情は恟懼す。溫嶠は屯を水北に移し、朱雀の桁（浮橋）を燒き以て其の鋒を挫き、含等は渡るを得ず。帝は新たに兵を將いて之を撃たんと欲し、橋の已に絶つを聞き、大いに怒る。嶠は曰く、

「今宿衛は寡弱にして、徴兵は未だ至らず、若し賊が豕突（猪突）すれば、危きこと社稷に及び、宗廟は且つ恐らくは保たず、何の一橋を愛まん乎！」

■ 【王導は王含を書で説得】 司徒の導は含に書を遣わして曰く、

「近ごろ承るに大將軍は困篤く、或は已に不諱有りを雲う。尋いで錢鳳が大いに嚴し、奸逆を肆^{ほしいまま}にせんと欲すを知る。謂うに兄は當に（鳳等を）抑制して（その凶逆を）逞^{たくま}しくせず、藩に武昌に還るべしと。今乃ち犬羊と俱に下る。兄之此の舉は、謂うに大將軍の昔年之事（元帝の永昌元年に王敦が石頭に勝つ）の如しを得る可き乎？昔年佞臣（刁協・劉隗）は朝を亂し、人は不寧を懷く。導之徒の如く、心は外濟（外に投じて以て自ら救わん）を思う。今則ち然らず。大將軍は來たりて於湖に屯し、漸く人心を失い、君子は危怖し、百姓は勞弊す。終りに臨む之日、重きを安期（王應の字）に委ねる。安期は乳を斷ちて幾日ぞや（少年という意味）？又た時望に於いて、便ち宰相之跡を襲う可き邪？開闢より以來、頗る宰相の孺子（子供、若造）を以て之と為る者有り乎？諸々耳有る者は、皆な將に禪代を為さんとするを知る、（6-034p）（禪代は）人臣之事に非ざる也。先帝は中興し、遺愛は民に在り。聖主は聰明にして、徳は朝野を洽す。兄は乃ち妄りに逆節に萌えんと欲し、凡そ人臣に在りて、誰か憤歎せずや！導の門戸の小大は國の厚恩を受け、今日之事は、目を明らかにして膽を張り、六軍之首と為り、寧ろ忠臣と為り而して死すとも、無賴と為り而して生きず矣！」含は答えず。

■ 【郗鑒は謀略持久戦を主張して勝つ】 或は以て為す

「王含、錢鳳は衆力百倍し、苑城（孫氏が秣陵に都して作る）は小さく而して固からず、宜しく軍勢未だ成らざるに及び、大駕は自ら出でて拒み戦うべし。」

郗鑒は曰く、

「群逆は縱逸にして、勢いは當たる可からず、謀を以て屈す可く、力を以て競い難し。且つ含等の號令は一ならず、抄盜は相い尋ぎ、吏民は往年の暴掠に懲りて、皆な人自ら守りを為す。逆順之勢いに乗ずれば、何ぞ克たざるを憂うるや！且つ賊は經略遠圖は無く、惟だ豕突して一戦するを恃む。曠日持久すれば、必

ず義士之心を啟き、智力をして展べるを得令めん。今此の弱力を以て彼の強寇に敵し、勝負を一朝に決し、成敗を呼吸に定める。萬一にも蹉跌すれば、**申胥**（呉人が郢に入り、楚の大夫の申包胥は秦に救援を求に遂に楚を存す）之徒有り、存するを義とし袂を投じる（慌てる）と雖も、何ぞ既往に補いあらん哉！」

帝は乃ち止む。

帝は諸軍を帥いて出で南皇堂に屯す。癸酉（3日）夜、壯士を募り、將軍の**段秀**、中軍司馬の**曹渾**等を遣わして甲卒千人を帥いて水を渡り、其の未だ備えざるを掩う。平旦、越城（秦淮の南）に於いて戦い、大いに之を破り、其の前鋒の將の**何康**を斬る。秀は、**匹磾**之弟也。

【王敦死す、王含・王應の壊滅】

■ 【失意の王敦死す、王應は偽装工作】 敦は含の敗れるを聞き、大いに怒りて曰く、

「我が兄は、老婢なる耳！門戸は衰える。世事は去る矣！」

顧みて參軍の**呂寶**に謂って曰く、

「我は當に力めて行くべし。」

因りて勢いを作して而して起つも、困乏（気が満たず力が出ない）して、復た臥し、乃ち其の舅の少府の**羊鑒**及び**王應**に謂って曰く、

「我死すれば、應は便ち即位し、先ず朝廷百官を立てて、然る後に葬事を營むべし。」

敦は尋いで卒し、應は秘して喪を發せず、屍を裹むに席を以てし、蠟を其の外に塗り、廳事の中に埋め、**諸葛瑤**等と日夜酒を縦にして淫樂す。

■ 【沈充は抵抗し、討伐軍起こす】 帝は吳興の**沈楨**をして**沈充**に説か使め、許すに司空と為すを以てす。

充は曰く、

「三司は具瞻（詩の節南山の篇に、赫々たる帥尹は民具に爾を瞻る・まばる・視る）之重きにして、豈に吾が任ずる所や！幣は厚く言甘きは（左傳に晉の郤芮曰く、幣重くして言甘きは我を誘うなり）、古人の畏る所也。且つ丈夫は事を共にすれば、終始當に同じくするべし、豈に中道にして改易す可けんや、人は誰か我を容れん乎！」

遂に兵を擧げて建康に趣く。宗正卿の**虞潭**は疾を以て會稽に歸り、之を聞き、兵を餘姚（會稽の県、浙江省會稽道餘姚県、現・寧波市余姚市）に起こし以て充を討つ、帝は潭を以て會稽内史を領せしむ。前の安東將軍の**劉超**、宣城内史の**鍾雅**は皆な兵を起こして以て充を討つ。義興（晉の惠帝の永興元年に吳興の陽羨・丹陽の永世を分けて義興郡を立てる）人の**周蹇**は王敦の署する所の太守**劉芳**を殺し、平西將軍の**祖約**（壽春に屯す）は敦の署する所の淮南太守の任台を逐う。

■ **沈充**は衆萬餘人を帥いて**王含**の軍と合し、司馬の**顧颺**は充を説いて曰く、（6-035p）

「今大事を擧げれば、而して天子は已に其の咽喉を扼し、鋒は摧け氣は沮み、相い持つこと日に久しく、必ず禍敗を致さん。今若し柵塘を決破し、湖水に因りて以て京邑に灌ぎ、水勢に乗り、舟師を縦ちて以て之を攻めれば、此くは上策也。初めて至る之銳きに藉り、東（沈充ら）、西（王含・錢鳳ら）軍之力を並せて、十道俱に進み、衆寡は過倍すれば、理は必ず摧陷せん、中策也。禍を轉じて福と為し、**錢鳳**を召して事を計り、因りて之を斬りて以て降る、下策也。」

充は皆な用いる能わず、颺は逃げて吳に歸る。

■ 【劉遐、蘇峻等は沈充らを破る】 丁亥（17日）、**劉遐**、**蘇峻**等は精卒萬人を帥いて至り、帝は夜見て、之を勞わり、將士に賜わるに各々差有り。**沈充**、**錢鳳**は北軍の初めて到りて疲睏するに因りて之を撃たんと欲し、乙未（25日）の夜、充、鳳は竹格渚（秦淮河の上流の渡し、江蘇省金陵道江寧県、現・南京市江寧区）より淮を渡る。護軍將軍の**應詹**、建威將軍の**趙胤**等は拒み戦い、利あらず、充、鳳は宣陽門（南門）に至り、柵を

抜き、將に戦わんとし、劉遐、蘇峻は南塘より横撃し、大いに之を破り、水に赴きて死する者は三千人。遐は又た沈充を青溪に破る。

■[周光は王敦の死を見抜く] 尋陽太守の周光は敦が兵を擧げるを聞き、千餘人を帥いて來たり赴く。既に至り、敦に見えんを求める。王應は辭するに疾を以てす。光は退きて曰く、

「今我は遠來而して見るを得ず、公は其れ死する乎！」

遽^{にわか}に其の兄の撫を見て曰く、

「王公は已に死せり、兄は何為れぞ錢鳳と賊を作すか！」

衆は皆な愕然とす。

■[王含の逃亡、帝は宮に還る] 丙申（26日）、王含等は營を燒きて夜遁げる。丁酉（27日）、帝は宮に還り、大赦し、惟だ敦の黨は原さず。庾亮^{ゆる}に命じて蘇峻等を督して沈充を吳興に追わしめ、溫嶠をして劉遐等を督して王含、錢鳳を江寧に追わしめ、諸將に分命して其の黨與を追わしむ。劉遐の軍人は頗る虜掠を縦にし、嶠は之を責めて曰く、

「天道は順を助け、故に王含は剿絶せり、豈に亂に因りて亂を為す可けん也！」

遐は惶恐して拜謝す。

■[王敦の黨は悉く殺される] 王含は荊州（王舒あり）に奔らんと欲し、王應は曰く、

「江州（王彬あり）に如かず。」

含は曰く、

「大將軍は平素は江州と雲何や、而して之に歸せんと欲する？」

應は曰く、

「此れ乃ち宜しく歸すべき所以也。江州は人の強盛の時に當たりては、能く同異を立てる。此れ常人の及ぶ所に非ず。今困厄^みを睹れば、必ず愍惻之心有り。荊州は文を守る、豈に能く意外に事を行わん邪！」含は従わず、遂に荊州に奔る。王舒は軍を遣わして之を迎え、含父子を江に沉める。王彬は應の當に來たるを聞き、密かに舟を具えて以て之を待つ。（王應は）至らず、（王彬は）深く以て恨みと為す。錢鳳は走りて闔廬洲（江中にあり、地勢は險奥）に至り、周光は之を斬り、闕に詣りて自ら贖う。沈充は走りて道を失い、誤りて故の將の吳儒の家に入る。儒は充を誘いて重壁の中に内れ、因りて笑いて充に謂って曰く、

「三千戸侯なり矣！」（朝廷は沈充に三千戸侯の懸賞金を付けていた）

充は曰く、

「爾は義を以て我を存せば、我が家は必らず厚く汝に報いん。（6-036p）若し利を以て我を殺せば、我が死して、汝の族は滅せん矣。」

儒は遂に之を殺し、首を建康に傳える。敦の黨は悉く平らぐ。充の子の勁は當に坐して誅せられんとし、郷人の錢舉は之を匿し、免かるるを得る。其の後に勁は竟に吳氏を滅す。

■[郗鑒は王敦の家の收葬を許すを進言] 有司は王敦^{えい}の瘞^{あば}（埋葬場所）を發き、屍を出し、其の衣冠を焚き、跽^{ひざまず}きて而して之を斬る。沈充の首と同じく南桁（朱雀桁）に懸ける。郗鑒は帝に言つて曰く、

「前朝は楊駿等を誅するに、皆な先ず官刑を極め、後に私殯を聽す。臣は以為うに王誅は上に加わり、私義は下に行なう、宜しく敦の家の收葬するを聽し、義に於いて弘と為すべし。」

帝は之を許す。司徒の導等は皆な敦を討つ功を以て封賞を受ける。

■[周撫・鄧岳は死を免じて禁固] 周撫は鄧岳と俱に亡げ、周光は其の兄（周撫）に資給し而して岳を取らんと欲す。撫は怒りて曰く

「我は**伯山**（鄧岳の字）と同じく亡げる、何ぞ先ず我を斬らざるや！」

會々**岳**は至り、**撫**は門を出て遙かに之に謂って曰く、

「何ぞ速やかに去らざるや！今骨肉は尚ほ相い危きを欲す、況んや他人を乎！」

岳は舟を回し而して走り、**撫**と共に西陽の蠻中に入る。明くる年、詔して**敦**の黨を原し、**撫**、**岳**は出でて首（自首）し、死を免かるるを得て禁錮す。

■ 〔張茂の妻の陸氏の敵討ち〕 故の吳内史の**張茂**の妻の**陸氏**は、家産を傾け、**茂**の部曲を帥いて先登を為し以て**沈充**を討ち、其の夫の仇に報いる。**充**は敗れるや、**陸氏**は闕に詣りて上書し、**茂**の為に克くせざる之責を謝す。詔して**茂**に太僕を贈る。

■ 〔王彬の除名回避〕 有司は奏す、

「**王彬**等は**敦**之親族なり、皆な當に除名すべし。」

詔して曰く、

「司徒の**導**は大義を以て親を滅す、猶ほ將に百世之を宥さん、況んや**彬**等は皆な公之近親なるを乎！」悉く問う所無し。

■ 〔溫嶠・郗鑒の反省の弁〕 詔有り、

「**王敦**の綱紀（府事を総理）は除名し、參佐（諸僚属）は禁錮せらる」

溫嶠は上疏して曰く、

「**王敦**は剛愎にして不仁、殺戮を行うを忍び、朝廷は制する能わざる所、骨肉の諫める能わざる所。其の朝に處る者は、恆に危亡を懼れ、故に人士は舌を結び、道路は目を以てし（ただ目を以て相い見るのみ、何も言わない）、誠に賢人君子は道窮まりて數盡き、遵いて時の晦きを養う（周頌の酌の篇の辭、晦きは昧き、率いて是の闇昧の君を養いて以て其の惡を長ぜしむるをいう）之辰也。其の私心の原は、豈に晏處（安處）に違あらんや！**陸玩**、**劉胤**、**郭璞**之徒の如きは常に臣と言ひ、備に之を知る矣。必ず其の凶悖を贊導し、自ら當に正すに典刑を以てす。其の枉げて奸黨に陷るが如きは、謂うに宜しく之に寬貸を施すべし。臣は**玩**等之誠を以て、聖聽に聞けば、當に賊を同じくする之責を受けるべし。苟くも黙し而して言わざれば、實に其の心に負き、惟だ陛下は仁聖之を裁くべし！」

郗鑒は以て為す、

「先王は君臣之教えを立て、節に伏し義に死すを貴ぶ。**王敦**の佐吏は、多く逼迫すると雖も、然るに進みて其の逆謀を止める能わず、退きて身を脱して遠く遁げる能わず、之を前訓に准じ、宜しく義責（大義を以て責める）を加えるべし。帝は卒に**嶠**の議に従う。（6-037p）

■ 〔朝廷の新体制〕 冬，十月，司徒の**導**を以て太保と為し、司徒を領せしめて、殊禮を加え、西陽王の**柔**をして太尉を領せしめ、**應詹**を江州刺史と為し、**劉遐**を徐州刺史と為し、**王邃**に代わりて淮陰に鎮ぜしめ、**蘇峻**をして歴陽内史と為し、**庾亮**に護軍將軍、**溫嶠**に前將軍を加える。**導**は固く辭して受けず。**應詹**は江州に至り、吏民は未だ安んぜず、**詹**は撫し而して是を懷き、悅服せざる莫し。

前涼 〔涼の辛晏の反、王鷲は趙に和好を保証せず〕 十二月，涼州の將の**辛晏**は枹罕（後漢に隴西郡、晉に晉興郡、甘肅省蘭山道導河県、現・臨夏回族自治州臨夏市）に據り、服さず、**張駿**は將に之を討たんとす。從事の**劉慶**は諫めて曰く、

「霸王之師は、必ず天の時、人事の相い得るを須ち、然る後に乃ち起つべし。**辛晏**は凶狂にして安んじて忍（人を殺せども心は矜惻せず、顔は顰蹙せず）ぶ。其の亡びるは必ずたる可し。奈何ぞ饑年を以て大舉し、盛寒に

城を攻める乎！」

駿は乃ち止む。駿は參軍の王鷲^{しゅう}を遣わして趙に聘し、趙主の曜は之に謂って曰く、
「貴州の款誠和好は、卿は能く之を保（保証）す乎？」

鷲は曰く、

「能わず。」

侍中の徐邈は曰く、

「君は來たりて好を結び、而して保す能わずを雲うは、何ぞ也？」

鷲は曰く、

「齊桓の貫澤之盟（公羊傳に、僖公三年に齊侯・宋公・江人・黄人は貫澤に盟う）には、憂心は兢兢たり。諸侯は召かずして自ら至る。葵丘之會には、振い而して之に矜る。叛く者は九國あり。趙國之化は、常に今日の如くなれば、可也。若し政教陵遲（徐々に殺す刑）すれば、尚ほ未だ邇^{ちか}（無駄に高遠なものや難しい理論を求めて、近くの真理を見落す）き者之變をすら察す能わず、況んや鄙州^{ひしゅう}を乎！」

曜は曰く、

「此れ涼州之君子也、使いを擇ぶに人を得ると謂う可き矣！」

厚く禮し而して之を遣る。

代^{だい}是の歲、代王の賀^が辱^{じよく}は始めて國政を親らし、諸部は多く未だ服せざるを以て、乃ち東木根山（帰化城の西）に築城し、徙りて之に居る。

肅宗明皇帝^下太寧三年（乙酉、325年）

前涼^{ぜんりやう}〔枹罕^{ふさん}の辛晏^{しんえん}降り、前涼河南回復〕春，二月，張駿は元帝の凶問を承け、大いに臨みて三日。會々黃龍^{わうりゆう}は嘉泉（武威の揖次県、甘肅省甘涼道古浪県の北、現・武威市古浪県）に見われ、汜^ふ禕^ぎ等は改年して以て休祥を章らかにせんと請う、駿は許さず。辛晏は枹罕を以て降り、駿は復た河南之地を收める。

■〔議論の末、周札に衛尉を贈る〕故の譙王の承、甘卓、戴淵、周顒、虞望、郭璞、王澄等に官を贈る。周札の故吏は札の為に冤を訟え、尚書の卞壺は議し、以て為す、

「札は石頭を守り（前卷元帝永昌元年）、開門して寇を延けり、當に贈諡すべからず。」

司徒の導は以て為す、

「往年之事は、敦^{あたら}の奸逆は未だ彰れず、臣等の有識より以上は、皆な未だ悟らざる所は、札とは異なる無し。既に其の奸を悟り、札は便ち身を以て國に許し（太寧二年）、尋いで梟夷（梟首夷滅）を取る。臣は謂うに宜しく周、戴と例を同じくすべし。」

郗鑒は以て為す、

「周、戴は節に死し、周札は寇を延く、事は異なれど賞は均しくば、(6-038p)何を以て勸沮（善を勧め悪を阻む）せん！司徒の議の如く、謂うに往年有識以上は皆な札と異なる無しならば、則ち譙王、周、戴は皆な應に責めを受けるべし、何の贈諡する之れ有らん！今三臣は既に褒せられ、則ち札も宜しく貶を受けべきは明らかなり矣。」

導は曰く、

「札は譙王、周、戴と、見る所異同有ると雖も、皆な人臣之節也。」

鑒は曰く、

「敦之逆謀は、霜を履む（策謀の久しきこと）こと日久しく、札が開門するに縁りて、王師をして振わざら令む。若し敦の前者之舉は、義は桓、文に同じならば、則ち先帝は幽、厲と為す可き邪！」
然して卒に導の議を用い、札に衛尉を贈る。

【後趙・前趙・慕容・宇文等の攻伐】

後趙▲**〔後趙は宇文乞得歸に慕容氏を責めさせ大敗〕**後趙王の勒は宇文乞得歸に官爵を加え、之をして慕容廆を撃たしむ。廆は世子の皝、索頭（編みに編んだ頭、拓跋氏・鮮卑の意で、南朝側からの別称）、段國を遣わして共に之を撃たしめ、遼東相の裴嶷を以て右翼と為し、慕容仁を左翼と為す。乞得歸は澆水（澆洛水、シラ・ムレン、西喇木倫）に據り以て皝を拒み、兄の子の悉拔雄を遣わして仁を拒ましむ。仁は悉拔雄を撃ち、之を斬る。勝ちに乗りて皝と與に乞得歸を攻め、大いに之を破る。乞得歸は軍を棄てて走り、皝、仁は進みて其の國城に入り、輕兵をして乞得歸を追わしめ、其の國の三百餘里を過ぎ而して還り、盡く其の國の重器、畜産を獲りて以て百萬を計り、民之降附する者は數萬。

段氏三月，段末杯は卒し、弟の牙は立つ。

■戊辰（2日），皇子の衍を立てて太子と為し，大赦す。

前趙趙主の曜は皇后の劉氏を立てる。

前趙 **後趙**〔石佗はオールドスで劉岳に敗れる〕北羌王の盆句除は趙に付き、後趙の將の石佗は雁門より上郡に出でて之を襲い、三千落を俘として、牛、馬、羊百餘萬を獲り而して歸る。趙主の曜は中山王の岳を遣わして之を追ひ、曜は富平（北地郡の県、甘肅省涇原道靈武県、現・寧夏回族自治区銀川市靈武市）に屯し、岳の為に聲援す。岳は石佗と河濱（大河の濱、^{オールドス}額爾多斯左翼後旗の界内、オールドス）に戦い、之を斬り、後趙の兵の死者は六千餘人、岳は悉く虜する所を収め而して歸る。

仇池〔楊難敵は仇池の田崧を斬る〕楊難敵は仇池を襲い、之に克ち、田崧（前趙は仇池に鎮させる前卷太寧元年に見える）を執り、之を前に立たしめ、左右は崧をして拜せ令む。崧は目を瞋らして之を叱して曰く、「**氏狗**や！安んぞ天子の牧伯に而して賊に向いて拜す有る乎！」

難敵は字で之に謂って曰く、

「子岱（田崧の字）よ、吾は當に子と共に大業を定め、子は劉氏に忠なり、豈に我に忠する能わざる乎！」崧は色を厲まして大言して曰く、

「賊氏、汝は本は奴才なり、何の大業を謂うや！我は寧ろ趙の鬼と為るも、汝の臣と為らず！」

顧みて一人を排して、其の劍を奪ひ、前みて難敵を刺さんとし、中たらず、難敵は之を殺す。

■**後趙**〔魯潛は後趙に降る〕都尉の魯潛は許昌を以て叛し、後趙に降る。（345年の墓誌あり。趙建武十一年大歳在乙巳十一月丁卯朔，故大僕卿、駙馬都尉、勃海趙安縣魯潛年七十五〔字世甫，以其年九月廿一日戊子卒〕，七日癸酉葬。墓在高決橋陌西行一千四百廿步，南下去陌一百七十步，故魏武帝陵西北角西行卅三步，北迴至墓明堂二百五十步，師上黨解建字子泰所安。墓入四丈，神道南向。）

■**後趙**夏，四月，後趙の將の石瞻は兗州刺史の檀斌を鄒山に攻め、之を殺す。（6-039p）

■**後趙**後趙の西夷中郎將の王騰は襲いて并州刺史の崔琨を殺し、上黨内史の王慎は并州に據りて趙に降る。

【陶侃は荊州刺史に】

■〔陶侃は荊州刺史、嚴正緻密公正〕五月，陶侃を以て征西大將軍、都督荊、湘、雍、梁四州諸軍事、荊州刺史と為し、荊州の士女は相い慶す。侃の性は聰敏恭勤にして、終日膝を斂めて危坐し、軍府の衆事は、

檢攝（檢制攝整）して遺す無く、未だ嘗て少しも聞なし。常に人に語りて曰く、

「大禹（禹は尺壁を貴ばずして、寸陰を重んず）は聖人にして、乃ち寸陰を惜しむ。衆人に至りて、當に分陰を惜しむべし、豈に但だ逸游（勝手気儘に遊び暮らす）荒醉す可けんや！生きて時に益無く、死して後に聞く無きは、是れ自ら棄てる也！」

諸々の參佐の或は談戲を以て事を廢する者は、命じて其の酒器、蒲博（博打）之具を取りて、悉く之を江に投げしめ、將吏には則ち鞭撻を加え、曰く、

「樛蒲する者は、牧猪奴（家豚を牧する人）の戯耳！老、莊は浮華にして、先王之法言に非らず、實用に益あらず。君子は當に其の威儀を正すべし、何ぞ有蓬頭（よもぎのように、ぼうぼうに伸びた頭髮）跣足（裸足）し、自ら宏達なりと謂う有る耶！」

饋を奉ずる者有り、必ず其の由る所を問ひ、若し力作して致す所ならば、微と雖も必ず喜び、慰めて參倍を賜わる。若し理の之を得るに非ざれば、則ち切厲（峻切嚴厲）に訶辱（責め咎める）し、其の饋る所を還す。嘗て出でて遊び、人の一把の未だ熟せざる稻を持つを見、侃は問う、

「此を用いて何をか為すや？」

人は云う、

「道を行きて見る所、聊か之を取る耳。」

侃は大いに怒りて曰く、

「汝は既に佃（耕作）せず、而して戯れに人の稻を賊すか！」

執り而して之を鞭つ。是れを以て百姓は農作に勤め、家は給し人は足る。嘗て船を造り、其の木屑竹頭を、侃は皆な籍（帳簿に記録）し而して之を掌（保管）ら令め、人は鹹な所以を解せず。後の正會に、積雪して始めて晴れ、聽事の前に餘りの雪は猶ほ濕り、乃ち木屑を以て地に布す。桓溫の蜀を伐つに及び、又た侃が貯える所の竹頭を以て丁（釘）を作りて船を裝す。其の綜理は微密にして、皆な此の類也。

【二趙の洛陽大会戦】

前趙 **後趙** **〔前趙・後趙は洛陽に激戦、石虎大活躍〕** 後趙の將の石生は洛陽に屯し、河南を寇掠し、司州刺史の**李矩**、潁川太守の**郭默**の軍は數々敗れ、又食は乏しく、乃ち遣使して趙に附く。趙主の**曜**は中山王の**岳**をして萬五千人を將いて孟津（現・河南省洛陽市孟津区）に趣か使め、鎮東將軍の**呼延謨**は荊、司之衆を帥いて崤、澠より而して東し、**矩**、**默**に會して共に**石生**を攻めんと欲す。**岳**は孟津、石櫟（河南省河洛道洛陽県、現・洛陽市洛竜区）の二戍に克つ。斬獲は五千餘級、進みて**石生**を金墉（洛陽の城）に圍む。後趙の中山公の**虎**は步騎四萬を帥いて、成皋關より入り、**岳**と洛西に於いて戦う。**岳**の兵は敗れ、流れ矢が中たり、退きて石櫟を保つ。**虎**は塹柵を作りて之に環らし、内外を遏絶す。**岳**の衆は饑えること甚しく、馬を殺して之を食う。**虎**は又た**呼延謨**を撃ちて、之を斬る。**曜**は自ら兵を將いて**岳**を救わんとし、**虎**は騎三萬を帥いて逆え戦う。趙の前軍將軍の**劉黑**は**虎**の將の**石聰**を八特阪（函谷の東坂）に撃ち、（6-040p）大いに之を破る。**曜**は金谷（河南省河洛道洛陽県の西、現・洛陽市洛竜区）に屯し、夜、軍中は故無くして大いに驚き、士卒は奔潰し、乃ち退きて澠池に屯す。夜、又驚き潰え、遂に長安に歸る。**六月**、**虎**は石櫟を抜き、**岳**及び其の將佐八十餘人、氏、羌三千餘人を禽とし、皆な襄國に送り、其の士卒九千人を坑にす。遂に**王騰**を并州に攻め、**騰**を執り、之を殺し、其の士卒七千餘人を坑にす。**曜**は長安に還り、素服して郊次（郊外に宿る）し、哭し、七日して乃ち入城し、因りて憤恚して疾を成す。**郭默**は復た**石聰**の敗る所と為り、妻子を棄てて南に建康に奔る。**李矩**の將士は陰かに叛きて後趙に降らんと謀り、**矩**は討つ能わず、亦た衆を帥いて南に歸る。衆

は皆な道より亡げ、惟だ**郭誦**等百餘人のみ之に隨う。魯陽（南陽郡に属す、河南省河洛道魯山県、現・平頂山市魯山県）に卒す。矩の長史の**崔宣**は其の餘衆二千を帥いて後趙に降る。是に於いて司、豫、徐、兗之地は、率ね皆な後趙に入り、淮を以て境と為す矣。

前趙趙主の**曜**は永安王の**胤**を以て大司馬、大單于と為し、徙して南陽王に封じ、單于台を渭城に置き、其の左、右賢王以下は、皆な胡、羯、鮮卑、氐、羌の豪桀を以て之と為す。

■**秋，七月**，辛未（7日），尚書令の**郗鑒**を以て車騎將軍、都督徐、兗、青三州諸軍事、兗州刺史と為し、廣陵に鎮ぜしむ。

閏月（閏八月、元嘉曆の九月か）、尚書左僕射の**荀松**を以て光祿大夫と為し、尚書事を録さしめ、尚書の**鄧攸**を左僕射と為す。

【明皇帝薨去と幼帝即位】

■ **〔明皇帝の薨去、虞胤らの陰謀〕** 右衛將軍の**虞胤**は、**元敬皇后**（元帝が琅邪王の時、虞氏を妃と為す。即位して追諡して敬皇后とす、元帝の諡に合わせる）之弟也、左衛將軍の南頓王の**宗**（汝南王亮の子）と俱に帝の親任する所と為り、禁兵を典り、殿内に直し、多く勇士を聚め以て羽翼と為す。**王導**、**庾亮**は皆な之を忌み、頗る以て言を為す。帝は之を待するに愈々厚く、宮門の管鑰（鍵と門かんぬき）は、皆な以て之に委ねる。帝は疾に寝ね、亮は夜表する所有り、宗に従いて鑰を求める。宗は與えず、亮の使いを叱して曰く、
「此れ汝の家の門戸なる邪！」

亮は益々之を忿る。帝の疾篤きに及びて、人の見るを欲せず、群臣は進むを得る者無し。亮は宗、胤及び宗の兄の西陽王の**羨**の異謀有るを疑い、**闔**（宮中の小門）を排して入りて御床に升起、帝を見て流涕し、言うに、

「**羨**は宗等と大臣を廢し、自ら政を輔けるを求めんと謀る、請う之を黜しりぞけん」

帝は納れず。壬午（19日）、帝は太宰の**羨**、司徒の**導**、尚書令の**卞壺**、車騎將軍の**郗鑒**、護軍將軍の**庾亮**、領軍將軍の**陸曄**、丹楊尹の**溫嶠**を引き、並びに遺詔を受けて太子を輔け、**更**（代わる代わる、更新）して殿に入り兵を將いて直宿せしむ復た**壺**を拜して右將軍とし、**亮**を中書令とし、**曄**を録尚書事とす。丁亥（24日）、遺詔を降す。戊子（25日）、帝（年27）は崩ず。帝は明敏にして機斷有り、故に能く弱を以て強を制し、逆臣を誅剪し、大業を克復す。

■ **〔五歳の皇太子の即位〕** 己丑（26日）、太子は皇帝に即位す、生まれて五年なり矣。群臣は璽を進め、司徒の**導**は疾を以て至らず。**卞壺**は色を朝に正して曰く、

「王公は豈に社稷之臣ならん邪！大行は殯に在り、嗣皇未だ立たず、**寧**いずくんぞ是れ人臣は疾と辭する之時也！」

導は之を聞き、疾を輿に而して至る。大赦し、(6-041p) 文武に位二等を増し、**庾后**を尊んで**皇太后**と為す。

■ **〔太后は臨朝し稱制〕** 群臣は帝の幼沖を以て、太后が漢の**和熹皇后**の故事に依るを奏請す。太后は辭讓すること四を數え、乃ち之に従う。**秋，九月（元嘉曆十月）**，癸卯（1日）、太后は臨朝し稱制す。司徒の**導**を以て尚書事を録さしめ、中書令の**庾亮**、尚書令の**卞壺**と與に朝政を參輔せしむ。然るに事之大要は皆な**亮**が決す。**郗鑒**に車騎大將軍、**陸曄**に左光祿大夫を加え、皆な開府儀同三司とす。南頓王の**宗**を以て驃騎將軍と為し、**虞胤**を大宗正と為す。尚書の**樂廣**（南陽の人）の子の**謨**を召して郡中正と為し、**庾珉**の族人の**怡**を廷尉評（漢は廷尉平を置き、晉は廷尉評とす）と為す。**謨**、**怡**は各々父の命と稱して就かず。**卞壺**は奏して

曰く、

「人は父無くして而して生まれるに非ず、職は事無くして而して立つに非ず。父有れば必ず命有り、職に居れば必ず悔い有り。家有りて各々其の子を私すれば、則ち王者は民無しと為し、君臣之道は廢す矣。**樂廣、庾鋌**は寵を聖世に受け、身は己の有に非らず、況んや後嗣に及び而して専らにす可き哉！居る所之職は、若し夫の群心^かに順えば、則ち戰戍者之父母は皆な當に子に命じるに處らざるを以てす也。」（人は誰しも死を望まないから、群衆の心に従えば、父母たる者子を兵役に出す者はいなくなる）

謨、怡は已むを得ず、各々就職す。

■辛丑（9日）、明帝を武平陵に葬す。

■冬、十一月（元嘉曆十二月）、癸巳（1日）朔、日食之れ有り。

段氏▲**〔段牙を殺して段遼自立〕**慕容廆は段氏と方に睦み、段牙の為に謀り、之をして都を徙さ使む。牙は之に従い、即ち令支を去り、國人は樂しまず。段疾陸眷之孫の遼は其の位を奪わんと欲し、都を徙すを以て牙の罪と為し、十二月、國人を帥いて牙を攻め、之を殺し、自立す。段氏は**務勿塵**より以來、日々益々強盛となり、其の地は西は漁陽に接し、東は遼水を界とし、統べる所の胡、晉は三萬餘戸なり、控弦は四五萬騎あり。

■**〔陶侃は尹奉を起用して寧州を安定させる〕**荊州刺史の陶侃は寧州刺史の王堅が寇を禦ぐ能わざるを以て、是の歲、表して零陵太守の南陽の尹奉を寧州刺史と為し以て之に代える。是より先、王遜は寧州に在り、蠻酋の梁水太守の**爨量**、益州太守の**李逖**は、皆な叛して成に附く。遜は之を討ちて克つ能わず。奉は州に至り、重く徼外の夷を募り**爨量**を刺し、之を殺し、諭して**李逖**を降し、州境は遂に安ず。

代代王の**賀辱**は卒す、弟の**紇那**は立つ。

肅宗明皇帝下鹹和元年、顯宗成皇帝上之上（丙戌，326年）

（成皇帝は諱は衍、字は世根、明皇帝の長子）

■春、二月、大赦し、改元す。

前趙**〔劉後の遺言で劉昶を重用〕**趙は汝南王の**鹹**を以て太尉と為し、尚書事を録さしめ、光祿太夫の**劉綏**を大司徒と為し、**卜泰**を大司空と為す。劉後は疾病となり、趙主の**曜**は言わんと欲する所を問う、劉氏は泣いて曰く、

「妾は幼にして叔父の**昶**に**鞠**（身を丸くかがめる、養われ）われる。（6-042p）願はくは陛下は之を貴ぶべし。叔父の**皚**之女の**芳**は徳色有り、願はくは以て後宮に備えるべし。」

言い終わりにて卒す。曜は昶を以て侍中、大司徒と為し、尚書事を録さしめ、芳を立てて皇后と為す。尋いで又た昶を以て太保と為す。

後趙**〔石勒は微行して檢察〕**三月、後趙主の**勒**は夜微行して諸營衛を檢察し、金帛を繼いで以て門者に賂し、出るを求める。永昌門侯の**王假**は之を収め捕えんと欲し、從者は至り、乃ち止む。且に、假を召し、以て振忠都尉（後趙の置く官）と為し、關内侯に爵す。勒は記室參軍の**徐光**を召し、光は酔いて至らず、黜て牙門と為す。光は侍直（近侍当直）して、愠（怒り）色有り、勒は怒り、其の妻子を并せて之を囚える。

後趙夏、四月、後趙の將の**石生**は汝南を寇し、内史の**祖濟**を執る。

【郗鑒・郭默・陶侃・蘇峻の各將軍】

■ 「劉遐の後継争い」 六月，癸亥（5日），泉陵公の劉遐は卒す。癸酉（15日），車騎大將軍の郗鑒を以て徐州刺史を領せしむ。征虜將軍の郭默を北中郎將と為し、淮北の諸軍事を監ぜしめ、遐の部曲を領せしむ。遐の子の肇は尚ほ幼く、遐の妹の夫の田防及び故の將の史迭等は他に屬するを樂しまず、共に肇を以て遐の故の位を襲わしめんとし而して叛す。臨淮太守の劉矯は遐の營（劉遐は泗口に屯し、臨淮下邳の間に在り）を掩襲し、防等を斬る。遐の妻は、邵續の女也、驍（勇ましい）果にして父の風有り。遐は嘗て後趙の圍む所と為り、妻は單り數騎を將いて、遐を抜き萬衆之中より出す。田防等が亂を作さんと欲するに及び、遐の妻は之を止めて、従わず、乃ち密かに火を起し、甲仗を焼き都て盡く、故に防等は卒に敗れる。詔して肇を以て遐の爵を襲わしむ。

■ 「厳格すぎる卞壺に人気無し」 司徒の導は疾を稱して朝せず、而して私に郗鑒を送る。卞壺は奏す、「導は法を虧き私に従う、大臣之節無し、免官するを請う。」事は寝ねて行わずと雖も、朝を擧げて之を憚る。壺は儉素にして廉絜、裁斷は切直に、官に當たりて干實なり、性は弘裕ならず、肯て苟くも時好に同じくせず、故に諸名士の少なき所（輕視）と為る。阮孚は之に謂って曰く、

「卿は常に閒泰（心の余裕）無し、瓦石を含むが如し、亦た勞せず乎！」

壺は曰く、

「諸君子は道德恢弘（押し広める）、風流を以て相い尚び、鄙吝（卑しくケチ）を執る者は、壺に非ず而して誰ぞや！」

時に貴遊の子弟は多く王澄、謝鯤を慕いて放達と為す、壺は色を朝に厲まして曰く、

「禮に悖れ教えを傷つけ、罪は焉より大なるは莫し。中朝（西晉）の傾覆するは、實に此に由る。」

之を奏推（上に奏しその罪を推按する）せんと欲し、王導、庾亮は聽かず、乃ち止む。

大成 成人は越嶲の斯叟を討ち、之を破る。（前卷明帝太寧元年に始まる）

■ 秋，七月，癸丑（25日），觀陽烈侯の應詹は卒す。

■ 「庾亮の狹量と蘇峻の脅威」 初め、王導の輔政するや、寛和を以て衆を得る。庾亮が事を用いるに及び、法に任じて物を裁き、頗る人心を失う。豫州刺史の祖約は、自ら以て名輩（名声年輩）は郗、卞に後れず、而るに顧命に豫からず、又た開府を望みて復た得ず、諸々の表請は多く許さ見れざるに及びて、遂に怨望を懷く。（6-043p）遺詔して大臣を褒進するに及び、又た及ばず、約と陶侃、二人は皆な庾亮が之を刪れるを疑う。歷陽内史の蘇峻は、國に功有り（沈充・錢鳳を破る）、威望は漸く著われ、銳卒萬人有り、器械は甚だ精にして、朝廷は江外を以て之に寄す。而して峻は頗る驕溢（きょういつ）を懷き、朝廷を輕んじる之志有り、亡命を招納し、衆力は日々多く、皆な食を縣官に仰ぎ、運漕は相い屬し、稍意の如くならざれば、輒ち忿言（ほしいま）をする。亮は既に峻、約を疑い、又た侃之衆を得たるを畏れ、八月，丹楊尹の溫嶠を以て都督江州諸軍事、江州刺史と為し、武昌に鎮ぜしむ。尚書僕射の王舒を會稽内史と為し、以て聲援を廣くする。又た石頭を修して以て之に備える。

■ 「阮孚は外出す」 丹楊尹の阮孚は太后が臨朝し、政は舅族に出でるを以て、親する所に謂って曰く、「今江東の創業は尚ほ淺く、主は幼なく時は艱なり、庾亮は年少く、德信は未だ孚（信ぜられる）せず、吾を以て之を觀れば、亂は將に作さんとす矣。」

遂に出でるを求め廣州刺史と為す。孚は、鹹之子也。

■ 冬，十月，帝の母の弟の岳を立てて吳王と為す。

■〔庾亮は南頓王の宗を殺して遠近之心を失う〕南頓王の宗は自ら職を失わんと以い怨望し（兵衛を解かれて恐れる）、又て素より蘇峻と善し、庾亮は之を誅さんと欲し、宗は亦た執政を廢せんと欲す。御史中丞の鐘雅は、

「宗は謀反す」

と劾し、亮は右衛將軍の趙胤をして之を收め使む。宗は兵を以て拒み戦い、胤の殺す所と為り、其の族を貶して馬氏と為し、三子の綽、超、演は皆な廢して庶人と為す。太宰の西陽王の兼を免じ、降して弋陽縣王に封じる、大宗正の虞胤は桂陽太守に左遷す。宗は、宗室の近屬、兼は、先帝の保傅なり（宗と兼は兄弟、宗は族を叙し、兼は官を叙すゆえに區別して表現）。亮は一旦に剪黜し、是に由りて遠近之心を失う。宗の黨の卞蘭は亡げて蘇峻に奔り、亮は峻に符して闡を送らしむ、峻は保ち匿して與えず。宗之死する也、帝は之を知らず、之久しく、帝は亮に問いて曰く、

「常日（平常）に白頭公は何くに在るや？」

亮は對えるに謀反を以て伏して誅すと。帝は泣いて曰く、

「舅は人が賊を作すと言ひ、便ち之を殺す。人は舅が賊を作すと言ひ、當に如何！」

亮は懼れ、色を變える。

前趙趙將の黃秀等は鄧（順陽郡の治所県、湖北省襄陽道光化県の北、現・襄陽市老河口市光化街道）を寇し、順陽太守の魏該は衆を帥いて襄陽に奔る。

後趙〔石勒は鄴宮大造營、石虎は去らず〕後趙王の勒は程遐之謀を用ひ、鄴宮を營み、世子の弘をして鄴に鎮ぜ使め、禁兵萬人を配し、車騎の統べる所五十四營は悉く之に配す。驍騎將軍の領門臣祭酒の王陽を以て専ら六夷を統べ以て之を輔けしむ。中山公の虎は自ら功多きを以て、鄴を去る之意無く、三台（二台とする書あり）を修め、其の家室を遷すに及びて、虎は是に由りて程遐を怨む。

後趙〔石聰は壽春を攻め、撃退するも祖約は怨む〕十一月、後趙の石聰は壽春を攻め、祖約は屢々表して救いを請ひ、朝廷は為に出兵せず。聰は遂に進みて逡遒（淮南郡、安徽省安慶道巢県、現・合肥市巢湖市）、阜陵（淮南郡、安徽省淮泗道全椒県の東、現・滁州市全椒県）を寇し、殺掠すること五千餘人なり。建康は大いに震ひ、詔して司徒の導に大司馬を加え、黃鉞を假し、中外諸軍事を都督せしめ以て之を御（統は禦）がしめ、江寧に軍す。（6-044p）蘇峻は其の將の韓晃を遣わして石聰を撃ち、之を走らせ、導は大司馬を解く。朝議は又た塗塘（統は塗塘、塗り壁の堤）を作りて以て胡寇を遏めんと欲し、祖約は曰く、

「是れは我を棄てる也！」（塗塘を作るに壽春はその外にあり）

益々憤恚を懷く。

■後趙〔石瞻が邾・蘭陵を抜く〕十二月、濟岷（魏が蜀の豪將の家を濟河の北に移し濟岷郡とす）太守の劉闔等は下邳内史の夏侯嘉を殺し、以て下邳は叛し、後趙に降る。石瞻は河南太守の王瞻を邾（山東省濟寧道鄒県、現・濟寧市鄒城市）に攻め、之を抜く。彭城内史の劉續も復た蘭陵（山東省濟寧道嶧県、現・棗莊市嶧城区）の石城に據り、石瞻は攻めて之を抜く。

後趙〔後趙の人材登用制度〕後趙王の勒は牙門將の王波を以て記室參軍と為し、九流を定めるを典らしめ、始めて秀孝（秀才・孝廉の科）、試經之制を定める。

前涼〔張駿は趙人を恐れて大成と結ぶ〕張駿は趙人之逼るを畏れ、是の歲、隴西、南安の民二千餘家を姑臧に徙し、又た使いを遣わして好を成に修め、書を以て成主の雄に、尊號を去り晉に稱藩するを勧める。雄は復書して曰く、

「吾は過ちて士大夫の推す所と為る、然るに本々は帝王となる心無し、晋室の元功之臣と為り、氛埃を掃除せんと思う。而れども晋室は陵遲（先細り）し、德聲は振わず、領を引いて東に望むこと、年月有り矣。會々來貺（來書）を獲て、情在りて暗に至り（内心に合致する）、何の已み已むこと有るや。」
是より聘使は相い繼ぐ。

肅宗明皇帝下鹹和二年（丁亥，327年）

■大成春，正月，朱提太守の楊術は成將の羅恆と台登に戦い、兵は敗れ、術は死す。

■夏五月，甲申（1日）朔，日食之れ有り。

前趙趙の武衛將軍の劉朗は騎三萬を帥いて楊難敵を仇池に襲い、克たず、三千餘戸を掠めて而して歸る。

【張駿は前趙に敗れて河南を失う】

前涼前趙張駿は前趙を弱るとみくびりて河南の地を失う張駿は趙の兵が後趙の敗る所と為るを聞き、乃ち趙の官爵を去り、復た晋の大將軍、涼州牧を稱し、武威太守の寶濤、金城太守の張閭、武興太守の辛巖、揚烈將軍の宋輯等を遣わして衆數萬を帥いて、東に韓璞（冀州にあり）に會し、攻めて趙の秦州諸郡を掠める。趙の南陽王の胤は兵を將いて之を撃ち、狄道に屯す。枹罕護軍の辛晏は急を告げる。秋，駿は韓璞、辛巖をして之を救わ使む。璞は進みて沃干嶺（晉興郡大夏縣の東北、洮水の西北、甘肅省蘭山道舊蘭州府内）を度る。巖は速かに戦わんと欲し、璞は曰く、

「夏末以來、日星は數々變有り、輕々しく動く可からず。且つ曜は石勒と相い攻め、胤は必ず久しく我と相い守る能わざる也。」

胤と洮（水）を夾みて相い持つこと七十餘日。冬，十月，璞は辛巖を遣わして運を金城に督せしめ、胤は之を聞き、曰く、

「韓璞之衆は、吾に十倍す。吾が糧は多からず、以て持久し難し。今虜は分兵して運糧し、天は我に授ける也。若し辛巖、璞等を敗れば自ら潰えん」。

乃ち騎三千を帥いて巖を沃干嶺に襲い、之を敗り、遂に前みて璞の營に逼り、璞の衆は大いに潰ゆ。胤は勝ちに乗りて追ひ奔り、河を濟り、攻めて令居（甘肅省甘涼道平番縣の西北、現・蘭州市永登縣）を抜き、斬首は二萬級、進みて振武（姑藏の東南、廣武の西北、甘肅省武威市）に據り、河西は大いに駭く。張閭、辛晏は其の衆數萬を帥いて趙に降り、駿は遂に河南之地を失う。

【庾亮は蘇峻の亂を呼ぶ】

■[庾亮は蘇峻召還を主導す]庾亮は以うに蘇峻は歷陽に在りて、終には禍亂を為すと、下詔して之を征せんと欲し、司徒の導を訪ねる。導は曰く、

「峻は猜險にして、必ず詔を奉らず、且く之を苞容するに若かず。」

亮は朝に於いて言つて曰く、

「峻は狼子にして野心あり、終に必らず亂を為さん。今日之を征すれば、縦え命に順わざれども、禍は猶ほ淺きと為らん。若し復た年を経れば、復た製す可からず、猶ほ七國之漢に於けるがごとき也。」

朝臣は敢えて難じる者無く、獨り光祿大夫の卞壺は之を争いて曰く、

「峻は強兵を擁し、京邑（建康と歷陽は揚子江を挟みて至近距離）に逼り近く、路は朝を終えず。一旦變有れば、蹉跌を為すは易し、宜しく深く之を思うべし！」

亮は従わず。壺は必ず敗れるを知り、温嶠に書を與えて曰く：

「元規^(庾亮の字)が峻を召す意は定まる、此れは國之大事なり。峻は已に出でて狂し、意^{うたが}いて而して之を召せば、是れ更に其の禍いを速める也、必ず毒蜚^{てつ}（毒を刺す）を縦^{ほしいまま}にして以て朝廷に向かわん。朝廷の威（峻は威力）は盛んなりと雖も、果たして擒とする可きや不^{いな}やを知らず。王公も亦た此の情を同じくす。吾は之と争うこと甚だ懇切なるも、之を如何とする能わず。本（温嶠を尋陽に鎮させる事）足下を出だし以て外援と為す、而して今は更に恨むは足下が外に在りて、相い與に共に之を諫止するを得ざるを、（足下と共に之を諫止すれば）或いは當に相い従う耳。」

嶠も亦た累りに書して亮を止める。朝を舉げて以て不可と為す、亮は皆な聽かず。

■ 「蘇峻は再三内輔を固辞し、反乱決意」 峻は之を聞き、司馬^{かじょう}の何仍を遣わして亮に詣らしめて曰く、「討賊を討つ外任は、遠近は惟だ命ずるまなり、内輔に至りては、實に堪える所に非ず。」

亮は許さず、北中郎將の郭默^(淮北の軍を監督す)を召して後將軍と為し、屯騎校尉を領せしめ、司徒右長史の庾冰を吳國內史と為し、皆な兵を將いて以て峻に備える。冰は、亮之弟也。是に於いて優詔を下し、峻を征して大司農と為し、散騎常侍を加え、特進に位し、弟の逸を以て代わりて部曲を領せしむ。峻は上表して曰く、

「昔明皇帝は親ら臣の手を執り、臣をして北に胡寇を討たしむ。今中原は未だ靖んぜず、臣は何の敢えて安きに即かん！乞う青州の界の一荒郡に補し、以て鷹犬之用を展べしめん。」

復た許さず。峻は嚴装し將に召しに赴むかんとするも、猶豫して未だ決せず。參軍の任讓は峻に謂って曰く、

「將軍は荒郡に處るを求めて而して許され見れず、事の勢いは此くの如し、恐らくは生きる路は無からん、兵を勅して自ら守るに如かず。」

阜陵令の匡術も亦た峻に反するを勧め、峻は遂に命に應じず。

■ 「陶侃を恐れる庾亮、蘇峻は祖約を味方にする」 温嶠は之を聞き、即ち衆を帥いて下りて建康を衛らんと欲し、三吳も亦た義兵を起こさんと欲す。亮は並びて聽かず、而して嶠に書を報じて曰く、

「吾は西陲^(陶侃)を憂い、歴陽^(蘇峻)よりも過ぎたり、(6-046p) 足下は雷池^(楊溪河、安徽省安慶道望江縣の南、現・安慶市望江縣)を過ぎること一步も無かりせる也。」

朝廷は遣使して峻を諭し、峻は曰く、

「台下は我が反せんと欲すと雲う、豈に活きるを得ん邪！我は寧ろ山頭に廷尉を望むとも、廷尉をして山頭を望ましむ能わず。往者^{きき}に國家の危きことは累卵の如く、我に非ざれば濟らず。狡兔は既に死し、獵犬は宜しく烹^にられる。但だ當に死して謀を造る者^(庾亮の事)に報いる耳！」

峻は祖約が朝廷を怨むを知り、乃ち參軍の徐會を遣わして約を推崇し、共に庾亮を討たんと請う。約は大いに喜び、其の從子の智、衍は並びに之を勧め成す。譙國內史の桓宣は智に謂って曰く、

「本、強胡の未だ滅びざるを以て、將に力を戮^{あわ}せて之を討たんとす。使君は若し雄霸と為らんと欲すれば、何ぞ國を助けて峻を討たざるや、則ち威名は自ら擧がらん。今乃ち峻と俱に反すれば、此れ安んぞ久しきを得る乎！」

智は従わず。宣は約に詣り見みえんと請う、約は其の諫めんと欲するを知り、拒み而して内れず。宣は遂に約を絶ち、之と同ぜず。十一月、約は兄の子の沛内史の渙、女婿の淮南太守の許柳を遣わして兵を以て峻に會さしむ。逖の妻は、柳之姊也、固く諫めるも、従わず。詔して復た卞壺を以て尚書令と為し、右衛將軍を領せしめ、會稽内史の王舒を以て揚州刺史の事を行わしめ、吳興太守の虞潭に三吳等諸郡軍事を

督さしむ。

■ 〔庾亮の優柔不断、先手を取られる〕 尚書左丞の孔坦、司徒司馬の丹楊の陶回は王導に言い、請う、「峻の未だ至らざるに及び、急に阜陵を斷ち、江西の當利（安徽省安慶道和県の東南、阜陵に麻湖の阻ありて當利の諸口を守るには蘇峻は江を渡れず、現・馬鞍山市和県）の諸口を守らん、彼は少なく我は衆し、一戰して決せん矣。若し峻が未だ來たらざれば、往きて其の城に逼る可し。今先ず往かざれば、峻は必ず先に至り、峻が至れば則ち人心は危駭し、與に戦うに難し矣。此の時は失う可からざる也。」

導は之を然りとする、庾亮は従わず。十二月、辛亥（1日）、蘇峻は其の將の韓晃、張健等をして襲いて姑孰（江渚の港、塩米を積む）を陷とさしめ、鹽米を取り、亮は方に之を悔やむ。

■ 壬子（2日）、彭城王の雄、章武王の休（義陽王望の孫）は叛きて峻に奔る。雄は、釋（宣帝の弟穆王權の子）之子也。

■ 〔建康戒嚴、迎撃態勢〕 庚申（10日）、京師は戒嚴し、庾亮に節を假し、征討諸軍事を都督せしむ。左衛將軍の趙胤を以て歷陽太守と為し、左將軍の司馬流をして兵を將いて慈湖（姑孰にあり、安徽省蕪湖道當塗県の北65里、現・馬鞍山市当塗県）に據らしめ、以て峻を拒む。前の射聲校尉の劉超を以て左衛將軍と為し、侍中の褚裒に征討軍事を典らしむ。亮は弟の翼をして白衣を以て數百人を領して石頭に備えしむ。

■ 丙寅（16日）、琅邪王の昱を徙して會稽王と為し、吳王の岳を琅邪王と為す。

■ 〔宣城内史の桓彝は朝廷側につく〕 宣城（宣城郡は安徽省蕪湖道宣城県、現・宣城市宣州区、宣城県は安徽省蕪湖道南陵県、現・蕪湖市南陵県）内史の桓彝^{かんい}は兵を起こして以て朝廷に赴かんと欲し、其の長史の裨惠^いは以うに、「郡兵は寡弱にして、山民（宣城の南の山越えの道の民は吳以来寇をなす）は擾^{みだ}れ易く、謂うに宜しく且く甲を按じて以て之を待つべし。」

彝は色を厲まして曰く、

『其の君に禮無き者を見れば、鷹鷂^{ようせん}（鷹と隼）之鳥雀（鳥と雀）を逐うが若し。（左傳、魯の大夫臧文仲の言）』（6-047p）今社稷は危うきに逼り、義は宴安する無し。」

辛未（21日）、彝は進みて蕪湖に屯す。韓晃は撃ちて之を破り、因りて進みて宣城を攻め、彝は退きて廣德（安徽省蕪湖道廣德県、現・宣城市広徳市）を保ち、晃は大いに諸縣を掠し而して還る。徐州刺史の郗鑒は所領を帥いて難に赴かんと欲し、詔して北寇（後趙への備え）を以て、許さず。

後趙 代 是の歲、後趙の中山公の虎は代王の紇那^{こつな}を撃ち、句注（山の名、山西省雁門山、代県西北、西陁山、陁嶺）陁北に戦う。紇那の兵は敗れ、都を大寧（廣寧、直轄省口北道宣化県・涿鹿県、現・張家口市宣化県・涿鹿県）に従して以て之を避ける。

代 代王の鬱律^{えいりつ}之子の翳槐^{えいかい}は其の舅の賀蘭部に居り、紇那は遣使して之を求め、賀蘭大人の藹頭^{あいとう}は擁護して遣らず。紇那は宇文部^{あいうん}と共に藹頭を撃ち、克たず。

令和3年4月22日 翻訳開始 10706 文字

令和3年4月30日 翻訳終了 21495 文字

令和3年11月22日 書下し終了 22402 文字